

# 上田秋成と西行没後六百年

—— 新出色紙の紹介と考察 ——

吉丸 雄哉

はじめに

上田秋成（一七三四—一八〇九）が亡くなって、昨年で二百年であった。『文学』（岩波書店。一・二月号）で特集が組まれ、天理図書館が企画展（一〇—十一月）を行った。今年も秋成を追慕する人々の心はやまず、天理図書館の展示（五月十六日—六月十三日）が東京で行われ、また京都国立博物館で特別展観（七月十七日—八月二十九日）が行われる。その他、京都新聞に「畸人秋成の世界」と題してリレー連載があるほか、同志社女子大学において連続講演会（六月十二・十三日）がある。秋成の墓所の西福寺では、命日の六月二十七日に秋成忌が行われる予定である。

秋成の展示などで新出資料がさまざま紹介され、活況を呈しているのだが、今のところ、それらで紹介の予定がなく、かつ秋成研究にとって重要とおぼしき資料を知り得た。幸い所蔵者の許可を得たので、本誌で紹介し、簡単な考察を付す。

資料 秋成色紙（縦二四・二センチ、横二五・六センチ）

紹介する資料は六枚つなぎ半双の屏風に貼りつけられたものの一つである。右上隅が本居宣長ではじまり、左下隅が本居大平で終わる貼りませ屏風は、当時の著名な学者・文人・画家・

俳人らの、懐紙・短冊・扇面・絵画・画賛などを、全部で二十点収める。雪と花を主題にした詩歌が多い。いずれも逸品であるが、紙幅の関係上、今回は秋成色紙のみの紹介とする。

【写真は本誌巻頭を参照のこと。撮影は吉丸】

西上人のたむけする日、世嗣直員が  
しら河の一枝亭にあそぶ。ゆふつけ  
て雪のふりければ。

もゝとせをかぞへつもりて六の花  
けふるる人のしのばるゝかな

老が身の花なきけふもながらへて  
そのきさらぎはやよひとやすぐ

餘斎

色紙下絵に模様のある箇所が六つある。模様は退色して土色であるが、もとは赤色だったか。不鮮明でもあり、模様の意図ははっきりしないが、形が二種類あることはわかる。第一首の「六の花」に関連し、桜の皮を染料とし、桜の切り枝を印判として、

六ヶ所に捺したのかもしれない。

秋成自筆の天理図書館所蔵『仰観俯察室記』は、料紙に彩色した木の葉が捺されている。天理ギャラー展示目録は「彩色した木の葉を押し散らし模様料紙は、寛政末から文化初頃に多く見られる」とする(1)。文化二年跋の秋成自筆稿本『海道狂歌合』にも木の葉の押し散らしは見える。本資料も同類と思われる。

#### 本資料の成立年次

本資料は歌二首とその詞書からなる。いずれも西行に関した内容である。

「西上人」は「西行上人」のことで、江戸期ではよくある呼称。秋成の『藤簍冊子』(文化二成、文化三・四刊)所収の「御嶽さうじ」にも「西上人」の表記が見える。

いまさらながら、西行の解説をしておく。西行は平安末期の歌僧であり、元永元年(一一一八)に生まれ、文治六年(一一九〇)二月十六日に河内の弘川寺で没した。俗名を佐藤義清という鳥羽上皇の北面の武士であったが、二十三歳のとき出家し、以後諸国を行脚しながら、歌作をし、生涯を送った。

秋成初期の浮世草子である『諸道聴耳世間狙』(明和三刊)と『世間妾形気』(明和四刊)の巻末広告には、「西行はなし」と小書した『歌枕染風呂敷』の名がある。西行は安永五年刊の『雨月物語』『白峯』の登場人物でもある。秋成の西行への関心はよく知られたことである。

本資料の成立年次は、西行の没年と関わる。西行の正確な没年月日は、文治六年二月十六日である。西行がかつて詠んだ「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」の歌と合致した。『長秋詠藻』『拾玉集』『拾遺愚草』などの記述をもとに、西行の没年月日は文治六年二月十六日で、現在は確定している。だが、江戸時代には、『古今著聞集』巻十三や『西行物語』の影響で、建久九年(一一九八)二月十五日説がむしろ流布していた。

西行が文治六年没と見るならば寛政元年(一七八九)が、建久九年没と見るならば寛政九年(一七九七)が、西行六百年忌(没後五百九十九年)となる。

江戸時代では建久九年説が流布していたとはいえ、正確には文治六年に没したことを知る人も少なくなかったらしい。講談社学術文庫『西行物語』の桑原博史解説は、

なお、『物語』が活字化されて流布したのにもかかわらず、西行の没年はやはり文治六年と一般には考えられていたらしい。というのは、彼の六百年忌にあたる寛政元年(一七八九)には『西行六百年忌追善和歌』を詠む人々がいたり、記念の木像を造ったりした記録が、少なからずあるからである。(248頁)

と記す(2)。

文治六年を没年とする追善では、元文四年(一七三九)に阿が『西行五百五十年忌追善和歌十九首』を詠んでいる。また、

讃岐の僧固浄が寛政元年に六百年忌の追善和歌を詠んだ(3)。

秋成は国学者なので、西行の没年が文治六年二月十六日であることを知っていた可能性は高い。もし、六百年忌であれば、本資料は寛政元年二月十六日の揮毫である。

ただし、「も」とせをかぞへつもりて六」であるため、六百年忌(没後五百九十九年)ではなく、単なる没後六百年で寛政二年の可能性もある。また、俗説とはいえども、建久九年二月十五日説に拠った六百年忌の寛政九年二月十五日か、六百年後の寛政十年二月十五日に詠んだ可能性もある。

このように本資料の成立年次はいくつか候補があるが、本稿は、寛政九年あるいは十年の成立と見る。

寛政元年と二年は秋成が医業をやめて撰津淡路庄村で過ごしていた時期である。特に寛政二年二月には、秋成は師であった加藤宇万伎の『土佐日記解』を書写し、加えた序の末尾に「寛政二年きさらぎその日、長柄の浜松のうづらの屋にて写しおさめぬ」と記している(4)。淡路庄村を離れたのは寛政八年三月ごろで、知恩院門前袋町に移り住んだ。

撰津淡路庄村から京へ移住した寛政五年前後から、秋成は「餘齋」の号を通称としたと長島弘明「秋成の筆名」はいう(5)。号の意味を「秋成の筆名」は、読書に適した三つの時である「三余」が意識され、また生業を廃して上京した自己の境遇への意識(余計者・余生)が投影して「よう」と説明する。

字体も寛政十一年「御嶽さうじ」(天理図書館蔵)や享和元年

の「吉野山和歌懐紙」(天理図書館蔵)をはじめ、寛政後期から享和ごろの秋成の字体に似る。

よって本資料の成立を寛政九年二月十五日あるいは十年二月十五日と推測する。

世嗣直員について

本資料の「世嗣直員」は世継直員のことである。

『平安人物志』文化十年版に、

画 世継直員 茅綿齋 世継八郎兵衛

とあり、『古今墨跡鑑定便覧』『画家書家医家之部』(嘉永七刊)には、

世継寂窓 名は直員。希仙と号す。画法を初め月仙に学んで後、元明の風を慕ひて風致あり。又煎茶に工みなり。和歌連歌を能くして其名あり。平安の高家たり。

と記される。

講談社『日本人名大辞典』で補えば、

生年不詳、一八四三。江戸時代後期の画家。

京都の豪商。画を僧月僊げつせんにまなび、のち元・明な(中国)の画風を習得。松かさをこのんでえがいた。和歌、連歌、茶道

にもすぐれ、茶器をつくった。天保14年死去。名は真員。

字は伯周。通称は八郎兵衛。屋号は岐阜屋。別号に希仙。

とある。和歌を介しての交流はすぐに考えられるが、秋成の『麻知文』(文化元頃成写)に、「世継直員と宇治の里にいきて、河の流に茶を煎んとて行。」とあり、煎茶の友人でもあった。

「しら河の一枝亭」は、世継直員の別荘だろう。秋成筆と思われる「一枝亭記」という小文がある。『上田秋成全集』11巻「歌文篇2」（中央公論社）が収める。中村幸彦の全集解説は、底本は藤井紫影編『秋成遺文』（増補版）の「補遺」所収のものとする。解説は続けて、

『秋成遺文』所収本文の底本は不明である。また、白河の別荘の主も、執筆年代も未詳。末尾に、「なには人鶉翁」との署名あるにより、ここに加えた。

と記す。

従来不明であった「一枝亭」が世継直員の別荘であることが判明し、また『上田秋成全集』の「一枝亭記」も秋成資料であることが確定したのは、本資料のもたらした成果である。なお、「一枝亭記」は亭の様子を次のように描写する。庵の様子も世継直員のものというに十分である。

この仮初なる庵は、元よりそれ（吉丸注、夜船物語に登場する何がしの法師のすみか）やつせしにはあらで、親おほぢの跡をかたじけなく受けつげる人の、時々通ひ来て、心を養ふばかりに作りなしたれば、山のとね達の窺ふべき物もおかず、つちの釜のたぎりに峰の松風を通はせ、思ふ事打出んにはとて、くぼめける石に筆ひとつかね採りそへたるのみなるは、心高き人の教へや習ひけむ、みづからのさがるまゝにやある。山々の春秋のほひ、滝つ瀬音のとはなる、道ゆき人の似てもとの人ならぬを、見くだし見

はるかしつゝ、月いづるまでとこゝに打ながめたらむ、中々に世をのがれはてたらむには勝りたため。世をのがれ果て何をかなす、たゞ／＼人は親おほ父の跡をかたじけなくしつゝ、家の風あまりにさわがしき時々、松の嵐、水の音に、耳しばしあらためむをこそ、世の楽みとは云べけれ。こは世の外のことわり知らぬ老がひが言をかいつけたらむに、誰かはとり見む。此白河の滝つながらのまゝに、跡なき波の藻屑とならばやとぞ思ふ。さてこのかりほの名のかしきにつきても、おのが上をさへ思ひ合されてなん。

つばさにはあらぬ我身も故里を雲井のよそに枝うつりして  
なには人鶉翁

残念ながら「一枝亭記」と本資料と、成立の前後は不明である。「我身も故里を雲井のよそに枝うつりして」とあるので、京に移り住んだ寛政八年以降、本資料と同時期に「一枝亭記」は成立したのかもしれない。

歌の解釈について

第一首「もゝとせをかぞへつもりて六の花けふゝる人のしのばるゝかな」が西行詠歌「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」を踏まえることはもちろんである。「六の花」は、「むつのはな」で、結晶の形からついた雪の異称。「ゆふつけて雪のふりければ」から実景として雪が降っている。こ

ここでは「雪」を「花」に見立た。

西行の秋成最晩年の随筆『胆大小心録』六（文化五頃成写）

は、

「桜を雲じやと見たて、又雪じやともいふ事、さいく人一人に聞うからず（吉丸注、歌の巧みな者一人か二人に限つては悪くは聞こえない）」と真淵はいはれしとぞ。

西行ほどの道人か、とかく雲かさくらに見へ、桜か雲に見えて、よしの山に三とせ、行ひのひま／＼には、雲じやと云歌たんとよまれたり。

と記す。西行の歌の特徴として、桜を雲や雪に見立たたものが多く、秋成は見ていたが、第一首は実景にもとづきその逆をいくことになった。

「つもり」「六の花」「ふる（降る）」が雪にまつわる縁語。「つもりて六」と「六の花」、「けふ降る」と「古人（いにしえの人。西行）」が掛詞。

歌の意味は「西行の死後から、百年を数えつもりて六つになつた（六百年経つた）今日、六の花との異称をもつ雪が降りつもる。それはまるで花吹雪が降りつもるようだ。如月の望月ころ桜の下で寂滅したいと願つた、いにしえの人西行が偲ばれるよ」というもの。

なお、「六の花」に関しては、宝暦十一年十月に亡くなった一炊庵小野紹簾の追善句集である、舞雪編『雪達摩』（玉曆十二刊）に「ふりつむや風賦比興の六の花」という秋成の発句が見える。

第二首「老が身の花なきけふもながらへてそのきさらぎはやよひとやすぐ」も西行「願はくは……」歌に基づく。「花なきけふ」は雪が降るような状況なので実際に開花が遅れているというよりは、概念的な「花」がない状況を詠んだと見ておく。

歌の内容は「自分は老残の身で花がない。花なき今日、もう如月の十五、六日だ。西行の命日には花は咲いたが、自分には咲かないまま弥生になるのだろうか」というもの。これが寛政十年の歌であれば、「老が身の花なきけふもながらへて」に前年十二月に妻珊瑚璣尼に先立たれた秋成の心情が読み込まれた、と言えるかもしれないが、それは少し想像がたくましくすぎるだろう。

おわりに

以上、本資料について簡単な紹介と考察を行った。最後に本資料の来歴を簡単に述べて、筆を擱くことにする。本資料は新潟出身で現在三重県にお住まいの方の家伝の品である。その方が三重県に至るまでに、神戸市長田区にお住まいになっていた時期もあったが、所蔵者が当地で阪神淡路大震災に遭遇した時には本資料は幸いにして神戸にはなく、消滅をまぬがれここに至つた。秋成にとつて「命禄」「遇・不遇」といった思想が重要であつたのは周知のことである。秋成没後二百年となり、秋成追慕の氣勢が高まるのに応じて、本資料も私の眼前に自然と現れたような気がしてならない。本資料が消滅の危機を幾度かくぐり抜けて今に至つたのとあわせて、本資料のもつ「命禄」や

「遇不遇」に思いを馳せずにはられない。

引用で特に注記のないものは『上田秋成全集』（中央公論社）から引用し、適宜濁点、句読点を補った。

本稿の作成にあたって、東京大学大学院長島弘明教授から多大なご教示を得た。謹んで御礼申し上げる。

〔注〕

(1) 「秋成 — 上田秋成没後二〇〇年によせて —」（天理ギヤ

ラリー展示パンフレット、平成22・5〜6、27頁）。

(2) 桑原博史『西行物語 全訳注』（講談社学術文庫、昭和56・4、248・249頁）。

(3) 香川県高等学校国語教育研究会編『香川の文学散歩』（香川県高等学校国語教育研究会、平成4・7、68〜70頁）。

(4) 高田衛『上田秋成年譜考説』（明善堂、昭和39、171頁）。

(5) 長島弘明「秋成の筆名」（『秋成研究』、平成12、68頁。初出は平成7）。

〔よしまる・かつや 本学教員〕